
小松原源五郎教授の書齋

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小松原源五郎教授の書齋

【Nコード】

N9031A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

何時でも何処でも本ばかり読んでいる小松原源五郎教授。そんな教授のところに行って来た若い娘さんは何と本の世界の人だった。その娘ちずると出会った教授は本の世界以外のことを知っていく。

第一章

小松原源五郎教授の書齋

京都は昔から大学の街と呼ばれている。かつて都であつた頃から貴族達も学問に励んでいた。紫式部が兄の勉強の時に一緒にいてその兄よりも漢文をスラスラと読んだ話も残っている。貴族達も学問には精通していたのである。

それから時代が下がって明治になり大正になつた。古都にある多くの大学の一つに小松原源五郎という教授がいた。

人はこの教授を評してよくこう言う。変わり者だと。

その大学の文学部で日本文学を教えていた。研究熱心であり知識は豊富だ。三十にして教授となつたのもその知識を買われてのことである。だがその生活があまりにも異様だつたのである。

研究熱心なのは誰もが認めるところだ。だがあまりにも熱心であり過ぎた。日がな一日本ばかり読んでいるのだ。講義がないならばそれこそ研究室から出て来ない。彼の書齋は本で埋もれ窓も床も見えない程だ。机の上にも読みかけの本が積み上げられ、彼はそこに座つてやはり本を読んでいる。学生達にもあまり興味がなく、結局は本ばかり読んでいたのである。そんな

彼を人々は書痴だの変人だの陰口を叩いていた。

だが彼はそうした噂も一切気にはしなかつた。やはり本ばかり読んで人付き合ひもない。当然結婚もない。彼の家もまた本ばかりであり活字ばかりがあつた。食べるものや着るものへの金も切り詰めてやはり本を買つて読む。それでも彼は一向に平気であつたのだ。

夏も冬も本を読む。雨でも雪でも。彼にとっては季節の移り変わりも天気もそんなに気になるものではなかつた。気になるのはやはり本のこと、字のことだつた。他には最低限の興味しなかつた。

ある秋の日。京都の秋は清々しい。あのうだるような夏が嘘のように過ぎ易くなる。もつともすぐに凍えんばかりの冬がやって来

るのだがこの時は違っていた。京都の秋はいいものである。

だがやはりと言うべきか小松原教授にはそんなことは関係なかった。その日も研究室で本を読んでいた。今度は何やら難しい漢文の本を読んでいた。

見ればまだ若いというのに髪は真つ白になっていた。顔は若々しいがどうにも健康的なものは感じられない。小さな目はやはり本に向けられている。背は高いが背中を折り曲げている為に一見ではそうは思えない。そんな風貌であった。

読みながらふと腕時計を見る。見ればもう大学を去らなければならぬ時間だ。

「もうこんな時間か」

彼は誰もいない部屋でこう呟いた。

「早いものだよな、本当に」

一日の時の流れがである。好きなことをしていると本当に時間の流れというものは早い。彼の場合は本を読んでいる場合である。だから今日も時間の流れを早く感じたのであった。本を閉じ家に帰ろうとする。

その際その読みかけの漢文の本に便箋を入れようとした。机を見回す。

「ええと」

見れば丁度いい便箋があった。若い女性が描かれている。袴の女学生だ。

「これはちよつとなあ」

実は教授はこうした格好の女学生に抵抗があるのである。

実は大正時代に流行ったこの袴の女学生というのは最初かなりはしたない格好とされていたのである。袴は男がはくものである女がはくものではないと思われてきたのだ。これは若い娘が外を歩く際に悪い虫がつかないようにと男の様な格好をさせたからである。

なおこの格好は明治帝も不快感を表わされたと言われている。だが後に下田歌子が自身の学園である実践女子高等学校において正式に

制服として定められてからようやく受け入れられたのである。ちなみにセーラー服は海軍の服装である。

「まあいいか」

だがそこにある女性の絵自体はよかつたので使うことにした。それをページに挟み閉じる。その時だった。

「はじめまして」

急に隣から若い娘の声が聴こえてきた。

「!?!」

教授はそれを聞いた時まずは幻聴かと思った。

「気のせいだな」

「あの」

だがそんな彼にまた声をかけてくるのだ。

「御聞きですか」

「聞こえているけれど」

どうやら本当に誰かいるらしい。声がする隣を見た。

「君は誰なんだい?」

「おわかりになれませんか?」

見ればそこには若い女学生がいた。

「君は!?!」

「私ですよ」

「私ですよと言われても」

この歳まで独身だったのは伊達ではない。彼にとっては見たこともない若い娘がそこにいたのだ。

「いきなり出て来られても。君は誰なんだい?」

「ちずるといいます」

女学生は名乗った。

「姓は………橋野とでもしておきましょうか」

その白く整った顔に笑みを作った。見れば目は切れ長で形がよい。唇は赤く小さい。そういえば何処かで見えた顔である。

「しておくってじゃあ今までなかったのかい」

「はい」

ちずるは答えた。

「実は名前も」

「何か訳がわからないな」

教授はそれを聞いて首を傾げるしかなかった。

「いきなり僕の隣に来て名前も姓も今作りましたって。おかしいじゃないか」

「おかしいですか？」

「おかしくなかったら何なんだよ。名無しだなんて」

「今本の世界から出て来たばかりですから」

「本の！？」

「はい」

ちずるは悪戯っぽく笑って答えた。

「本の世界から」

「ってここからかい」

「そうですよ」

教授は本棚にこれでもかと並べられた本の山を指差して言う。ちずるはそれに対して笑いながら答えるのである。

「それが何か」

「じゃあ君は人間じゃないのかい」

何かと科学的なものが尊ばれていた時代であったが彼は全てにおいて科学を優先させる男ではなかった。

本を見れば何かと妖怪や幽霊といったものが出て来る。彼はそうしたものを否定しないのである。

「いえ、人間です」

「けれど本の世界から出て来たって」

「教授」

ちずるはまた笑って言った。

「こつちの世界だけが世界じゃないんですよ」

「とどうと？」

「他にも世界は一杯あるんですよ」

「一杯って」

はじめに聞いただけではどうにもピンと来ない言葉だった。

「今僕がいる世界だけじゃなくて他にも世界があるのか」

「そうですね」

見ればちずるはやっぱり笑っていた。

「本の世界もそうですね」

「ふむ」

「まあこつちの世界だけってことはないということですよ」

「そうか、面白い話を聞いたよ」

教授は思わず顔をほころばせた。本ばかり読んでいる彼が人との話で顔をほころばせるのはかなり珍しいことであった。

「本の世界のことは」

「こつちの世界には前から来たって思っていたのですよ」

「前からか」

「けれど。中々来れなくて」

「それはまたどうしてだい？」

「本のせいですよ」

「本の」

「はい」

ちずるは言った。

「実は教授がいつも本を読んでおられるので。私が出られなかったんですよ」

「またおかしなことを言うな」

教授はそれを聞いて目を丸くさせた。

「私が本を読んでいると君が出られない」

「そうですねですよ」

ちずるは頷く。

「試しに本を開いて下さい」

「うん」

言われるまま本を開く。するとちずるは急に姿を消した。

「あれっ」

見ればちずるは何処にもいない。まるで煙の様に消えてしまっていた。

第二章

「また面妖な」

本を閉じる。すると光の様に出て来た。

「ほら、言った通りでしょう?」

「うっむ」

「教授の目の前だけなんですけれど」

「じゃあ私が君の側で本を開けば君の姿が消えると」

「そうです」

「閉じれば君が出て来るのか。これはまた」

「おかしいですか?」

「おかしいって言うより変な話だよ」

本を机の端に置いて言う。

「私と教授が一緒にいる時だけですから」

「ふむ」

「私が出たり消えたりするのは」

「じゃあ君は普通の生活はできるのか」

「はい」

ちずるはまた頷いた。

「もう自然に」

「そうか」

「それで教授」

ちずるは急に甘い声を出してきた。女学生特有のハリと色気が同時にある声だ。教授も男である。その声に心を動かされないと云えば嘘になる。

「何だい?」

「お話があるんですが」

ちずるもしたたかである。わざわざ耳元で囁いてきた。どうやら彼女はその外見から出て来るイメージよりも男というものを知って

いるようだ。

「話つて」

「一緒に住みませんか？」

「君とかい？」

「そうですね」

わざわざ媚惑な笑みも向けてきた。計算づくのようだ。

教授もそれはわかつている。だが一人身でありそろそろ妻も欲しいかな、と思つていた頃だ。女は実は嫌いではない。乗ることにした。ちずるに顔を向ける。

「それじゃあ」

「いいんですか？」

「ちよつと待つた」

晴れやかな顔になつたちずるを一旦止める。

「本当にいいんだね」

まずは念を押しした。

「勿論ですよ」

ちずるは迷うことなく言葉を返す。

「ですから先生の前に出て来たんですよ」

「それじゃあわかつてると思つけど」

とにかく念を押しす。

「僕の家は凄いのよ」

「知つてますよ」

ちずるも言葉を返す。彼女は明るい声だった。

「本だらけだつて仰りたいんですよ」

「そう」

教授はそれを聞いて大きく頷いた。

「それはもう凄いものだけれど」

「ですから私は本の世界から来たんですよ」

「平気なのかい？」

「そこから来たのに平気も何もないじゃありませんか」

笑ってこう言う。

「そうじゃないんですか？本は私にとって寝床みたいなものなんですよ」

「寝床か」

「ええ」

「それじゃあ大丈夫だね。けれどいいかい」

「何ですか？」

「周りからくれぐれも変とは思われないように。本の世界から来た
だなんて」

「大丈夫ですよ、先生」

ちずるは笑ってまた言った。

「本の世界から来たなんて誰が信じます？」

「しかしだね」

教授はまずそれを心配していたのだ。何処から来たと言われて本から来た、ではあからさまにおかしい。そうならばちずるも自分も厄介なことになると思ったからだ。

「ここにいるって言えばいいじゃありませんか」

「ここって京都かい？」

「はい。お役所の住民票つてやつも簡単に書き換えられますし」

「そんなことができるのか」

「私は本の世界にいますから」

答えになっっているようななっていないような返事だった。

「そんなの簡単ですよ」

「簡単っていうけどね」

「中に入って書き換えればいいんですから」

「それで済むのか」

「はい。それで私は目出度く京女に」

鮮やかな赤い色の袴をひらひらさせながら言う。

「うら若き都の乙女と一緒に。先生、果報者ですよ」

「今一つ信じられないなあ」

ちずるの軽い調子に不安を拭いきれないのだ。

「そんな簡単に話が済むのだろうか」

「こつちの世界だけならそうもいかないでしょうね」

ちずるはあっけらかんとして言った。

「けれど私は元々こつちの世界の人間じゃありませんから」

「大丈夫なのか」

「そういうことです。それじゃあ帰りましょう」

「うん」

ちずるに促されるまま研究室を出て家に帰る。もう暗くなった京の道を二人で歩いていく。

古い背広を着て帽子を被ったまずは品のいい格好の教授と鮮やかな女学生姿のちずる。お似合いとは少し言い難い組み合わせの二人が夜道を歩いているのはおかしいと言えばおかしい光景であった。

「道は知ってるよね」

「勿論ですよ」

「やっぱり知ってるかい」

「地図の本に入ったこともありますから」

「そうなのか」

「私は本なら何処にも入り込めるんですよ」

「羨ましいな」

教授はそれを聞いて思わずこつ呟いた。

「何処にでも行けるなんて」

「けれどどれは先生が本を読んでいる間だけですよ」

「そうだったね」

「それに。今は先生のお側にいる方が」

「ここへきてお世辞かい？」

「違いますよ」

ちずるは笑ってそれを否定した。

「だって先生を選んでここへ来たんですから」

「僕をかい」

「そうですね。本が好きな人だから来たんですよ」
「へえ」

そう言われて悪い気はしなかった。

「ですから。宜しくお願いしますね」

「うん、わかったよ」

こうして二人は一緒になった。教授ははじめて若い女性と二人暮らしとなりこれまでとは全く違って変わった幸せな日々を過ごすようになった。そしてそれは学校の中でも噂になった。

「最近小松原教授変わったな」

「ああ」

生徒や教授達も口々にそう噂し合った。

「何でも結婚したらしいぞ」

「嘘だろ、それは」

「いや、本当に。それも若くて綺麗な女の人だ」

「本当なのか、それは」

「つい最近まで女学生だったらしいな」

そういう触れ込みになっている。誰もちずるの本当の姿を知りはしない。知ることも出来ない。

「羨ましいな、それは」

「まああの本の虫の教授に奥さんができただけでも驚きだが」

「まあな」

「ただ。ちょっと変わったな、教授も」

気付く者は気付いていた。

「変わった!？」

「ああ。前程本を読まなくなったな」

「そういえばそうだな」

「あれはまた何でだ？」

「本以外にも興味のあるものができたんだろう」

「奥さんのことか」

外れてはいないが真相を知らない言葉であった。

「多分そうだろうな」

「うつむ、実に意外だ」

皆異口同音にこう述べた。

「結婚しただけでなく愛妻家にまでなったとは」

「こりや近々大変なことが起こるな」

「地震でも来るかな」

だがこれは実際には何時でも来るものだ。たまったものではないが日本ではとかく地震が多い。戦争よりもこちらの方がずっと怖い程だ。戦争は外交的努力で避けられるが地震はそうはいかないからだ。

「おいおい、縁起でもない」

「さもなければ雷か火事や台風か」

「だから縁起でもないって」

「いや、本当に信じられないからな」

それだけ小松原教授とちずるのが信じられないのだ。

「まさかなあ」

「まあそうだが」

「けれどまあ教授も人間だったということだな」

ここで実に失礼な言葉が出て来た。

「奥さんを持つてそれを好きなんだから」

「そうなるかな」

「そういうことだ。まあここは祝うとしよう」

「ああ」

「林念仁だった教授が真人間になったことに」

「乾杯というか」

何だかんだと理由をつけて飲み屋へ向かった。この時代の学生も何かあれば飲みに行くのは変わりはない。これは教授達も同じであった。

とかく教授とちずるのは話題になっていた。しかし二人はそれを気にしてはいなかった。

二人は仲睦まじい夫婦となっていた。誰の目から見ても普通の夫婦に見えた。

本当のことは二人だけが知っている。二人しか知ることが出来なかった。

第三章

「なあ」

教授は自宅で一杯やりながらちずるに声をかけてきた。

「何でしょうか」

ちずるは酒の肴を出しながらそれに応えてきた。肴は豆腐である。ここ京都ではとかく豆腐が知られている。湯豆腐はとりわけ有名であり南禅寺の湯豆腐は名物にさえなっている。

「誰も御前のことはわからないみたいだな」

「それは当然ですよ」

ちずるは笑ってこう返してきた。

「だって外見は他の人と変わらないでしょう？」

「うん」

その通りである。どっからどう見ても普通の人間だ。

「本当のことは。私と教授しかわかりませんよ」

「そうだな」

「けれど。一つだけ気をつけて下さい」

「一つだけ？」

「そうです。本のことです」

ちずるは真顔になって豆腐を差し出した。そこに醤油をうっすらとかけて食べる。あっさりとした食べ方だ。

「本か」

「教授が本を開くと私は消えてしまいます」

「うん」

「そして閉じると出て来ます。これは教授が何処にいても変わりません」

「では昼はまずいな」

「そうです。買い物の時なんか本を開かれたら」

「買った物だけ置いてどろんか」

「そうです。料理を作っている時なんかはもつとまですいですよ」

「それは困ったなあ」

「ですから。気をつけて欲しいんです」

「つまり昼は用心してくれということだな」

「そういうことです」

ちずるは言った。

「夕方なら大丈夫でしょうか」

「まあ夕方はな」

教授は少し考えた後で述べた。

「講義も殆どないしな」

「それじゃあその時に買い物をして」

「いや、待てよ」

だが教授はここで気付いた。

「それじゃあ私はろくすっぽ本を読めなくなるぞ」

「どういうことですか？」

「いや、御前と会った時を思い出してくれ」

教授は言った。

「あの時は夕方だったな」

「はい」

「私は本を読んでいた」

「はつきりと覚えていますよ」

「だからだ。私はいつも夕方でも何時でも本を読んでいたんだよ」

それが今までの教授の生活だった。寝ても覚めても本ばかりだっ

たのだ。

「何時だったね」

「それで何と」

「だから。夕方とかは読めなくなるんだよな」

「そうなりますね」

ちずるはあっけらかんとした声で返してきた。

「それが何か？」

「それは困ったことだ。私が本を読む時間がなくなるんだ」

教授は心から困ったといった顔になってしまっていた。酒を飲みながら苦り果てた顔になっていた。

「どうしようか。弱ったなあ」

「教授」

だがちずるはそんな彼に対してここで言った。

「何だい？」

「本が一番大事なんですか？」

「本が」

「そうです。私はその本の世界から出て来たから言いますけれど」
彼女は本当に真剣な顔になっていた。ここまで真面目な顔のちずるは教授もはじめて見た程であった。そこまで真剣な顔であったのだ。

「本が一番大事なんですか？教授にとっては」

「そう言われると」

困った顔になった。

「確かに今まではそうだったよ」

まずはこう答えた。

「けれど」

「けれど？」

「今はね」

彼は述べた。

「それだけじゃない」

「それじゃあ」

「うん。何て言うかな」

ちずるに目をやって静かな声で述べる。

「僕はね、今まで女性と付き合ったことがないんだ」

まずは自分の身の上を語った。

「ずっとね。この歳になるまで本当になかったんだ」

「左様ですか」

「本ばかり読んでいたよ、本当に」

元々そうした学者の家に生まれた。そしてその言葉通り本当に本ばかり読んでいたのだ。物心ついた頃から来る日も来る日も。本を開かない日はなかった。

目が覚めれば本を読み、それから目を閉じて眠るまで本を読んできた。ずっとそうやって暮らしてきた。この三十年の間ずっとそうやって暮らしてきた。それで三十で教授にまでなった。本が全てなのは本当だった。

「いつもね」

「それは知っておりますよ」

ちずるは教授の言葉の後でそう言った。

「だから私も教授の側へ来られたんですから」

「私が本ばかり読んでいたからかい？」

「はい」

彼女は言った。

「教授は。もう私と同じでしたから」

「本の世界の住人とか」

「そうです。けれどその本の世界の女が尋ねますよ」

「うん」

「教授は。今も本が一番大事なんですか？」

真顔で問う。

「他には大事なものは。ないのですか？」

「じゃあ言うよ」

教授も意を決した。まずはぐいと一杯飲む。

ちずるはそこに注ぐ。それを受けてからまた口を開く。

「今は違うよ」

「違う」

「うん。確かに今だって本は大事さ」

彼はまた言った。酒は飲んではいるが酔ってはいない。

「けれど。一番大事じゃない」

「すると一番大事なのは」

「わかつてると思うけれど」

そう言つてちずるを見やる。

「その本が巡り合わせてくれた女だよ」

「それでは」

「本当にこれも何かの縁なんだろう」

教授はここでまた一杯飲んだ。

「御前と会つたのも。まずは巡り合わせてくれた本に一杯」

「おっと」

また酒を注ぐ。それを一杯飲むとまた酒が注がれる。

「そして今度は」

「私に一杯」

「一番大事なね」

今度の一杯は飲まない。そこにちずるの顔を映してきた。

「有り難うございます」

「けれどそう言わないと怒つたところなんだろう？」

「実家に帰らせてもらおうと思つてました」

「それは困るな」

「ですよ。それじゃあ」

「一杯やるかい？」

「いえ、私は」

断つた。どうやら酒は好きではないらしい。

「それじゃあ」

教授はちずるを飲みながら一杯やつた。それは今までの酒と比べて比較にならない程美味く感じた。そしてその訳も自分でわかつていた。

教授の家庭は実に円満なものだつたという。それまで本しか知らなかつた教授は家庭人としては実に穏やかでよき夫、優しき父であつた。そうなつた理由は当然あつた。ちずるは何時までもそんな彼の側において優しく、美しい笑みをたたえていたという。大正の時代

の慎ましやかな話であった。

小松原源五郎教授の書斎

完

2006・5・15

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9031a/>

小松原源五郎教授の書齋

2010年10月8日15時49分発行